



No. 123 2021. 9. 8

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

コロナ禍でもできることを



9月2日（木）に松が丘小で6年生の子どもたちと地域の皆さんとの交流会がもたれました。交流会といっても Zoom で6年生の教室とまち協さんの役員会が開かれているコミセンの会議室を結んで10分程度、子どもたちが考えていることの提案を行ったようです。

1学期はコロナ等の影響で、6年生が「松が丘プロジェクト」として計画していた地域の方と共に行う活動がすべてできませんでした。「人とのつながりを大切にする松が丘」をテ

ーマに取り組んできた6年生は、「このコロナ禍でこそつながりたい」という思いを持ちながら、不完全燃焼のまま1学期が終わってしまいました。そうした6年生の子どもたちの思いを、松が丘小で夏季休業中に行われる2学期以降の方向性を考える学年戦略会議で学年の1番の課題として検討されました。緊急事態宣言や警報で、1学期の松が丘プロジェクトも自分たちだけの活動のみとなり、地域との関わりはゼロに。保護者や地域にアンケートをとり、今後の松が丘プロジェクトの案も考えていただけに、担任もうまく進めることができないもどかしさと、何より子どもたちのモチベーションをどう維持するかについて熟議がなされたようです。



今年の6年生は、地域の老人宅の朝のゴミ出しを手伝ったり、土曜日に地域のふれあいガーデンの作業を手伝ったりする子どももいるようです。その思いをどう全体に広げるか、今年のテーマである「人とのつながりを大切にする松が丘」をどう実現するかが学年戦略会議の中心でした。そして最終的に、できないことを挙げるのではなく、できることを挙げていく。原点に還り、「こんなコロナ禍だからこそどうつながるのか？」を子どもたちに投げかけてはどうか？という結論になったようです。

これまで、6年生担任がまちづくり協議会に出席し、地域の方に松が丘プロジェクトの活動について説明することは行われていました。しかし、オンラインでつながれるようになった今年度、2学期になって子どもたちと考える中で、いっそのこと6年生の教室と会議室をつなぎ、直接地域の方に話しかける場をつくらうということになったようです。子どもたちと地域の方との初めての出会いと松が丘プロジェクトの案を説明するアウトプットの場づくりです。



自分たちが今考えていることを知ってもらおうということで、10分程度ですが、1学期末に自分たちで考えた「松が丘プロジェクト」の案を地域の方に聞いてもらったそうで

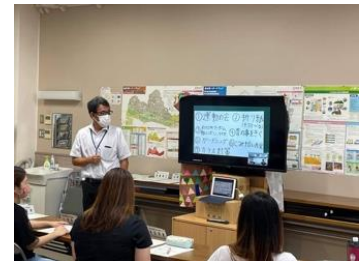
す。地域の方の映像が出るなり、地域の方が大きく手を振って喜んでくれたのでうれしかったようです。また、地域の方の反応(どんなことがしたいか)が聞けたことが子どもたちのモチベーションを高めたようです。10分ほどのやりとりでしたが、終わった後、教室で



自然と拍手がわき起こったそうです。また、まちづくり協議会役員会に参加された方は、こうしたオンライン会議用マイクに、大きなモニターという環境で初めて Zoom を体験された方も多く、「子どもたちと話すと元気をもらう」「こんな感じで話せるのは楽しい」といった感想を持たれていたようです。

オンラインという環境が整うことによって松が丘ではこのような子どもと大人の交流が日常化していったら面白いなと思いました。そのためにも、子どもも大人もこうした交流の経験を積み重ねていくことが必要なんだろうなと思います。こうした子どもと大人の交流が日常化することが学校と地域のシームレス化につながっていくんだろうなと思います。

学校(子どもたち)が今していること、今考えていることを地域の方に知ってもらうことは、大切なことだとはもちろん思っていました、それは楽しいことであり、うれしいことであり、わくわくすることでもあります。子どもたちの最終目標は「ありがとうと言う存在から、ありがとうと言われる存在へ」です。まずは遅まきながらの第一歩。自分たちが地域の方とつながったことで自然と拍手がわき起こったのではないかと思います。いいぞ6年生!



松が丘サミット、松が丘プロジェクトは松が丘小学校の文化になっています。しかし、気をつけなければならないことは、活動することが当たり前になるのではなく、何のために活動するのか?という目的を大切にすることです。今年のテーマは「人とのつながりを大切にす松が丘」です。原点を忘れることなく、コロナ禍でもできることを子どもたちと一緒に考えていきたいと思っています。

校長としては、こうした地域も巻き込んでカリキュラムをつくっていくことが、社会に開かれた教育課程そのものになるのではと思っています。 松が丘小北迫校長

松が丘の6年生の子どもとまち協さんの交流の様子を聞きながら、子どもも、教師も意識はしていないが、学校の教室の中での時間割で割り振られた“勉強”といった枠から、社会につながる、社会とつながる“学び”への変化が始まってきているのではと感じます。ある地域では地域の方の支援を受けながら高齢者宅のゴミ出しがここ数年続いています。また、土曜日にふれあいガーデンでの活動に参加する子どもが出てきています。松が丘プロジェクトから一歩踏み出し、地域に関わる子どもたちが生まれてきたのはコミスクに取組み始めた頃には考えられませんでした。そうした中での経験を通して今まで気がつかなかった社会の課題、地域の課題が見えてくるようになってきているのではと思います。勉強ではなく、学びが学校から地域へ、地域から学校へといった流れが生まれてきているように思います。今回の松が丘プロの提案の中にも「カラス対策」といったものがあるのもその現れではと思います。子どもも大人も学びを通して市民として育てていく仕組み、明石の目指すコミュニティ・スクールなのではと思います。個人的に、「カラス対策」みたいな地域の課題を通して環境や行政etc.につながる学び場をコミセンの講座として「カラス講座」みたいなものが子どもも大人もこの指とまれ方式で学び場が生まれて来たら学びのシームレス化につながっていくのではと妄想が広がってしまいました。何を学んだか、どんな学び方をしたかが問われるこれからの社会を生きていく子どもたちのためにも勉強から学びへの変化が必要だと考えています。 (文責：北本)